方谷學舎高等学校 野球部通信

球學道

— 野球から、人生を學ぶ —

発行日 令和８年10月22日

No. 第５号

文責 小西

１．高校野球も教育も、よりよく生きるための礎を築く営み ― 知識よりも見識、見識よりも胆識を ―

私は、**高校野球も教育も、人がよりよく生きていくための礎を築く営み**であると考えています。文明がどれだけ進化し、AIやデジタル技術が発達しようとも、人間の幸福の多くは、結局のところ他人との人間関係の中にあるのではないでしょうか。

人から信頼されること。誰かのために力を尽くすこと。仲間と喜びを分かち合うこと。時にはぶつかり、傷つき、それでも相手を理解しようとすること。こうした人と人との関わりは、結果や数字だけでは決して割り切れません。どれだけ文明が発達しても、人間が人間と関わりながら生きていく世界は、どこまでも泥くさい「アナログの世界」なのだと思います。

だからこそ、教育も高校野球も、単に知識や技術を身につけるだけの場所であってはならないと考えています。大切なのは、「知識よりも見識、見識よりも胆識」です。知識とは、物事を知っていること。見識とは、その知識をもとに物事の本質を見極め、正しく判断すること。そして胆識とは、正しいと判断したことを、困難や批判を恐れず、覚悟を持って実行する力です。本校が大切にしている「至誠惻恒」「知行合一」も、まさにその精神です。

そして、日本人が大切にしてきたものの一つに、「情」があります。自分に都合の悪いことが起きた時、他人に指を向ける前に、まず自分自身に指を向ける。自分の利益や都合ばかりを優先するのではなく、相手の立場を考え、時には自分よりも他者を優先する。

しかし、今の野球部の現状を見ると、あまりにも情けなく、残念に思うことが続いています。本気で苦しみ、悩みながらチームを良くしようとしている仲間に対して、「リーダーぶるな」という言葉を平気で投げかける生徒がいる。保護者の方が働き、決して安くはないお金を出して買ってくださったスパイクを、感情に任せて投げつける。そして、その行為を指導者から注意されると、素直に受け止めるどころか逆上し、寮のルールまで破ってしまう。週に一度の完全休養・治療日も、選手たちを信頼し、自分自身で身体や時間を管理できるようになってほしいという思いから設けたものです。それにもかかわらず、食堂の方や指導者への連絡もなく、通院後に外で食事を済ませ、点呼に遅れる。さらに、そのことを注意した仲間や先生に対して、反省するどころか感情的に反発する。授業中も、先生によって態度を変え、厳しく注意する先生の前では真面目に振る舞い、そうでない先生の授業では平気で態度を崩す。

そして、何より問題なのは、そうした仲間の姿を見ていながら、誰も本気で注意しようとしないことです。そんな考え方であるならば、野球の技術を磨く以前の問題です。今のままでは、野球に取り組む姿勢を根本から問い直さなければなりません。

高校野球は、好き勝手に野球をするための場所ではありません。保護者の皆様が多くの時間と費用をかけ、学校の先生方、食堂の皆様、指導者、地域の方々が支えてくださっている。その環境があるからこそ、選手たちは毎日野球に打ち込むことができています。**そのことへの感謝もなく、自分の都合や感情ばかりを優先するのであれば、どれだけ野球が上手くなっても、人として大切なものを失ってしまいます。**

「自分は悪くない」「自分なりにはやっている」「あいつが悪い」「指導者が厳しすぎる」。そのように、何かあるたびに自分を守り、他人に原因を求めている限り、人は成長しません。本当に強い人間とは、自分の弱さや未熟さを認められる人間です。自分の間違いから逃げず、他者からの指摘を受け止め、行動を変えられる人間です。

今のままでよいとは、到底思えません。だからこそ、今、本気で変わらなければならないのです。

２．教育は、「サービス業」ではない

今の教育現場を見ていると、疑問を感じることが少なくありません。生徒や保護者は、教育を購入する「お客様」。先生は、教育という商品を提供する「サービス労働者」。お客様に失礼のないように、苦情が出ないように、決められたマニュアルに従って淡々と仕事をこなし、一日を無難に終えることが最優先。そのような考え方を、当たり前のように口にする教員や指導者まで現れる時代になりました。私は、そのような教育には、納得ができない部分があります。

もちろん、学校や指導者には説明責任があります。保護者の皆様の声に耳を傾け、間違った指導は正し、改善すべきことは改善しなければなりません。それは当然のことです。

しかし、生徒や保護者の望むことをすべて受け入れることが、本当に教育なのでしょうか。生徒が嫌がるから注意しない。保護者から苦情が来るかもしれないから踏み込まない。問題が起きれば面倒だから、最初から何もさせない。それで表面上は平穏な学校や野球部ができるのかもしれません。しかし、そのような環境で育った生徒が、社会に出て理不尽なことに直面した時、自分の力で乗り越えていけるのでしょうか。

波風を立てないことと、生徒を育てることは、決して同じではありません。教育も高校野球も、人と人とが本気でぶつかり合い、磨かれながら、つながっていく場所です。間違っていることは間違っていると伝える。本人が逃げようとする時には、逃げずに向き合うよう促す。自分の弱さを認めさせ、もう一度挑戦させる。

そこには当然、葛藤もあります。時には生徒から反発されることも、保護者の皆様と意見が食い違うこともあるでしょう。

それでも、**目の前の生徒の将来を本気で考えるのであれば、言わなければならないことがある。譲ってはいけないことがある。**それが、教育に携わる人間の責任ではないでしょうか。

３．本気でぶつかった先にしか、生まれない関係がある

実際に、昨年度卒業した生徒や卒業生の保護者の皆様、そして現在の ３ 年生やその保護者の皆様とは、今では本音で語り合える関係になっていると、私自身感じています。もちろん、最初からそのような関係だったわけではありません。時には厳しく指導し、意見がぶつかり、互いに悩み、簡単には理解し合えないこともありました。しかし、私はその時々で、生徒の将来を考え、本気で向き合ってきたつもりです。**その場を無難に収めることよりも、その生徒が ５ 年後、10 年後にどう生きているかを大切にしてきました。**

だからこそ、卒業しても関係が続き、本音で話ができるのではないかと思っています。高校野球は、３ 年間で終わります。しかし、人と人との関係は、卒業したら終わりというものではありません。本気で向き合った大人の言葉や姿勢は、卒業後も生徒の心に残るはずです。**生徒に好かれることが、指導者の仕事ではありません。生徒の人生に責任を感じ、その成長に本気で向き合うことが、指導者の仕事だと思っています。**



４．冬は人間としての「根っこ」を伸ばす時期

冬は、人間としての「根っこ」を伸ばす時期。これから春までは公式戦がありません。試合という目に見える目標が遠くなり、選手にとっても指導者にとっても、厳しい時期に入ります。しかし、私はこの時期こそ、最も大切にしなければならない時間だと考えています。**冬は、野球の技術だけではなく、人間としての「根っこ」を伸ばす時期だからです。**

時間を守る。食事を大切にする。授業に真剣に取り組む。自分のことは自分でする。嘘をつかない。仲間が間違っている時には声をかける。自分の弱さから逃げない。こうした当たり前のことが、まだ十分にできていない選手もいます。だからこそ、これからもさまざまな問題が出てくるでしょう。しかし、私は問題が出ること自体を恐れてはいません。むしろ、問題が出てこないことの方が怖いとさえ感じています。

表面上は何も起きず、うまくいっているように見えるチームでも、実際には問題を見て見ぬふりをしているだけかもしれませ

ん。指導者が嫌われることを恐れ、生徒が本音を隠し、互いに踏み込まない。そうした環境では、課題は解決されず、見えないところに積み重なっていきます。そして、そのまま卒業すれば、社会に出てから本人が大きな壁にぶつかることにもなりかねません。

高校生で失敗し、注意され、自分の未熟さを知り、やり直す。私は、それも高校野球の大切な価値だと思っています。

もちろん、問題が起きれば何でもよいということではありません。生徒の安全や尊厳を守ることは大前提です。その上で、表面化した課題から目をそらさず、教育の機会として向き合っていきたいのです。



5. 現状維持は、退化である

今回、野球部の指導体制が大きく変わりました。体制が変われば、さまざまな問題が出てくるのは当然です。これまで見過ごされていたことに目を向け、当たり前になっていたことを見直し、新しい基準をつくろうとすれば、必ず摩擦が生まれます。

しかし、**何も問題が起きないようにすることを最優先にしていては、何も変わりません。現状維持は、変化する社会の中では退化です。**

私は、それを覚悟した上で、野球部の指導にも、学校改革にも日々向き合っています。

「波風を立てないように」「何事も起こらないように」「保護者が望むように」

そのようなことばかり考えていれば、確かに指導する側は楽かもしれません。しかし、**その結果、生徒が社会に出て困るのであれば、一体誰のための教育だったのでしょうか。私は、目先の平穏を守るために、生徒の将来を犠牲にしたくありません。**もちろん、私自身も未熟です。判断を誤ることもあれば、指導の方法を反省することもあります。だからこそ、指導者自身も学び続け、間違いがあれば認め、変わらなければならないと思っています。

しかし、**生徒の成長を願うという教育の根本だけは、決して譲りたくありません。**私たちが育てているのは、今だけを無難に過ごせればよい子どもたちではありません。これから何十年という人生を、自分の足で歩み、さまざまな人と関わり、時には理不尽なことにも直面しながら生きていく若者たちです。その時に必要なのは、野球の技術だけでも、学校で身につけた知識だけでもありません。

自分の非を認める素直さ。人の痛みを理解する優しさ。困難から逃げない強さ。仲間を大切にする情。そして、正しいと思ったことを実行する胆識です。**勝つために野球をする。しかし、勝つことだけが高校野球の目的ではない。**これからも、生徒と本気でぶつかり、悩み、考え、ともに成長していきたいと思います。

そして、保護者の皆様にも、目先の勝敗や一時的な感情だけではなく、子どもたちが卒業後、どのような人間になっていくのかという視点を、ぜひ共有していただきたいと思っています。**本当に必要な教育とは何か。**

その問いから逃げず、たとえ時間がかかっても、人としての根っこを太く、深く伸ばせる場所にしていきたいと考えています。

6. 食事トレーニングの意識醸成―身体づくりへの覚悟はあるのか

前回の『球學道』でも掲載しましたが、現在、野球部では食事を「身体づくり」の重要なトレーニングの一つとして位置付け、取り組みを進めています。平日の夕食では、白米 1,200g を目安とすることに加え、1 時間目から 4 時間目までの間に補食としておにぎりを摂取できる体制を整えています。食堂の皆様やマネージャーの松岡さんにもご協力いただき、継続できる環境づくりを進めています。

また、体重を定期的に記録し、自分の身体がどのように変化しているのかを確認する取り組みも始めています。もちろん、単に大量の食事を詰め込めばよいという話ではありません。「なぜ食べる必要があるのか」「自分にはどれだけの栄養が必要なのか」「どのような身体をつくりたいのか」を選手自身が理解し、自分の身体に責任を持つことが目的です。

しかし、こうした取り組みに対して、一部の保護者の方から「食事をきつそうに食べている」「生徒の意思が反映されていない」といった声があることも耳にしています。このことについて、率直に申し上げたいと思います。

高校野球で本気で身体をつくり、勝負しようとしているのであれば、今までと同じ食生活、今までと同じ意識のままで、身体だけが大きくなるはずがありません。身体づくりには、相応の努力と継続が必要です。好きなものだけを食べ、食べたい量だけを食べ、苦しくなればやめる。それで自分の目指す身体を手に入れられるのでしょうか。

今回の食事トレーニングは、私から提案したものではありますが、最終的には**選手たち自身が「やる」と決めた取り組み**です。自分たちで決めたことに対して、少し苦しいからといってすぐに後ろ向きになるのであれば、何のために目標を立てたのでしょうか。もちろん、食事量には個人差があり、体格や体調、消化能力などを無視して無理に食べさせることが正しいとは考えていません。1,200g という数字も、全員に一律に強制するものではなく、身体の状態や専門家の助言を踏まえて考える目安です。しかし、**「苦しいからやらなくてよい」という考え方と、「身体の状態を考えながら努力する」という考え方は、まったく違います。**

私が危惧しているのは、食事量そのもの以上に、選手や周囲の大人たちの**身体づくりに対する意識や覚悟**です。高校野球に本気で取り組むために、親元を離れ、寮生活を選んだはずです。日々の生活を野球に結びつけ、仲間と高め合い、自分の可能性に挑戦する。そのための環境を、学校も食堂も指導者も、そして保護者の皆様も協力して整えています。それにもかかわらず、一部の保護者の方から少し負荷がかかるたびに「かわいそう」「そこまでしなくてもよい」という話になるのであれば、**一体、何のために覚悟を決めて寮生活をしているのかという話になります。**

今後は、元東北楽天ゴールデンイーグルスの岩見雅紀さんにもご協力いただき、専門的な食事トレーニングの導入を検討していますが、専門家に指導していただいたところで、本人に学ぶ姿勢や実行する覚悟がなければ、何も変わりません。保護者の皆様にもその意義をご理解いただけなければ、継続的な取り組みは難しくなります。

環境を整えても、本人の意識が変わらなければ身体は変わりません。指導者がどれだけ本気になっても、選手自身が本気にならなければ意味がないのです。「強くなりたい」と口にするだけでなく、そのために必要なことを日々の行動で示す。本気で向き合うとは、グラウンドにいる時間だけ頑張ることではありません。生活そのものを変える覚悟を持つことです。

7. 総監督から（小谷理事長）

前号で「男の子が男にならない世の中」についてお話しし、日本中が「母という病」(岡田尊司氏 ポプラ新書)に犯されている現実をお伝えしたところですが、就学前、小学校、中学校でその傾向は激しく、さらに「家庭でしつけるべき事柄」をすべて「学校に依頼する傾向」が顕著になっています。教育は、学校で行うことはもちろんですが、何といっても最初の学校は『家庭』。『3 つ心、6 つ躾、9 つ言葉、12 文、15 理で末決まる』と江戸時代から 6 歳の各家庭での躾がいかに人間形成上大きいかを表す言葉としてつながってきました。

『しつけ』は『おしつけ』。すべてにおいて、各家庭できちんとした『型』を作らなければならないにもかかわらず、昨今は家庭の教育力が極端に低下し、その過程で『おしつけ』て作られるはずの「子どもの習慣」までもが学校に押し付けられているのが日本の異常さの一つ。

各家庭で『社会に出たときに望ましい生活習慣』、『一人暮らしができるように慣らしていく親の段階的な指導』があってこその子どもたちの成長であり、「集団生活」はそれを『全体の場で試す』ところなのです。

そういう意味で子どもたちを見ていると、年々、一人で生活できない子が増加していることは間違いありません。今一度、家庭での教育を見直し、しっかりと『失敗させ』『恥をかかせて』立派な人間に育てていく必要がある日本なのです。

まして、野球部の子どもたちは、学校のリーダーとしての部員、日本を背負って立つ可能性がある『野球人』です。そういう誇りを育てるためにも『親』が不便、不自由、不親切を承知の上で目を離さずに手を放す家庭教育であってほしいと願っています。